

パーソナリティ心理学と社会心理学における 個人差変数の理論的構図 (I)

— McCrae と Costa による Five Factor Theory について —

東 正 訓

Theoretical framework of individual difference variables in personality and social psychology (I)

— McCrae & Costa's five factor theory —

Masanori HIGASHI

要 約

パーソナリティの5因子モデルは、パーソナリティ特性の個人差に関する共変動に関する実証的一般化であり、混乱のあったパーソナリティ次元に関する議論に統一をもたらした。5因子モデルを基礎にして、McCrae & Costa (1996, 1999) は「パーソナリティを一つのシステムとしてみなし、そのシステム全体と要素の定義、規定を与え、システムがどのように組織化され、相互作用し、発達していくかを説明するための理論」である5因子理論を提唱した。5因子理論は、パーソナリティに関する現在までの知見と一貫した理論を構築する試みである。本稿では、5因子理論をパーソナリティ心理学や社会心理学における個人差変数を扱う研究のためのガイドラインとして有効なメタ理論であると考え、詳しい紹介と検討をおこなった。

キーワード：Big 5, 特性論, メタ理論, パーソナリティ, システム的理解

はじめに

これまでのパーソナリティ心理学の実証的研究には理論的背景が不足している¹⁾。難しい理論をこねくり回すより、実証へと傾斜する数量的研究への志向。生きている生身の人間に接近せねばならないとする質的研究への志向。一見両極端な二志向だが、理論への志向性は比較的乏しいという点で共通しているのではないか。社会心理学でも、帰属理論などで有名な H. H. Kelly をして最後の理論家とよんでいた時期が 1980 年代後半まで続いた。今日、自己、社会的認知を中心にして有望な中範囲 (middle range) の理論がでていますが、それでも、パーソナリティ領域と関係する「個人差変数」を扱う場合には、社会心理学者は理論的背景の不足に悩まされる。とりわけ、研究枠組みの設定、実証すべきモデルや測定変数の設定においては、研究者の経験と直感に頼ることが多く、依るべきメタ理論があればと思うことが多い。このような認識のもと、本研究では、パーソナリティ心理学、社会心理学における個人差変数を扱う研究のフレームワークがぜひとも必要と考え、そのために有益と考えられるメタ理論 (中範囲理論を含む) を紹介・検討を加えることにした。

さて、理論不足であるといっても、パーソナリティ心理学や社会心理学には、有効な中範囲の理論が提案されており、研究も進んでいる。あたかもジグソーパズルを完成させるがごとく、それらの中範囲の理論が多く提出され、全域を覆うことができれば、包括的な人間理解につながるという見方もあるだろう。そのような立場の研究者からすると、本研究の試みは、かつて社会学が目指し挫折に終わった構造—機能分析に代表されるような grand theory (誇大理論) への傾倒であり、今日のパーソナリティ心理学、社会心理学にとってもあまり意味がないのではと思われるかもしれない。しかし、「全体は部分の総和ならず」である。

さらに、ホットな注目をあつめる既存の中範囲の理論をめぐってその実証と理論の精緻化にたずさわる研究者たちはばかりではない。マーケティングなど応用場面や既存の研究蓄積を利用できない場合、そして新たな枠組みを構築する場合には、研究計画段階でモデル構造の設定、測定すべき変数を枚挙することは、非常に困難であり、研究者の経験に基づく名人芸にたよるか、ショットガンのような探索的研究をするしかない²⁾。理論的検討が不十分なままにとりあえず収集されたデータを分析した結果が大量生産されているが、知見の集約にはつながりにくいという近年の研究動向を批判する研究者も多い。

このような現状においては、研究をすすめるうえでガイドラインとなる枠組みが、有効な研究を生み出すうえでも、多くの知見を集約するためにも必要ではないか。とりわけパーソナリティ特性や信念、態度などの構成概念をあつかう領域では、参考となるような鳥瞰的な理論的枠組みやメタ理論が知られておれば、より着実な研究の蓄積がもたらされるのではないか。膨大な研究知見を整理し、着実に研究を進めていく上で、やはり何らかの統合的理論、もしくはメタ理論は

必要である。

そこで、本研究では、実証研究の枠組みづくりや変数設定、モデル作りに資すると考えられるいくつかの有望な理論、メタ理論をレビューし、検討を加えていくことにした。まず本稿では、近年脚光を浴びているパーソナリティ特性の Big 5 モデルのプロtagonist である McCrae と Costa らによる 5 因子理論（Five factor theory, FFT と省略する場合がある。McCrae & Costa, 1996, 1999）というメタ理論に焦点を当てることにした。本論に入る前に、パーソナリティ特性論とは、特性論の危機とは、Big 5 とは何かなど、McCrae と Costa の 5 因子理論が生み出されたパーソナリティ心理学の背景を簡単にのべておくことにしよう。

パーソナリティ特性

パーソナリティ特性（personality trait）を簡単にいえば、「個人を特徴づけるところの思考、感情、行為に関する、種々の状況を越えて比較的持続的に見られるパターン、傾向性」である。特性論にたつ心理学者にとっては、パーソナリティの個人差を記述する基本単位である。よく混同される概念として態度（attitude）の概念がある。態度とパーソナリティ特性とを比べるとパーソナリティ特性の特徴が理解しやすい。

態度（attitude）とは、「あの若者の態度はしっかりしている」というような日常の用法とはことなる。まず、社会心理学のテクニカルタームとしての態度の今日的な定義は次の通りである。

「人や事物・社会問題に対してもつ、一般的で持続的な、肯定的または否定的な感情（Petty & Cacioppo, 1981）」

「特定の対象に対して、好意または非好意の程度の評価によって表現される心理的傾向性（Eagly & Chaiken, 1993）」

態度は社会心理学では行動の予測因の一つとして位置づけられる。例えば、ある人の環境問題への態度の内容や強度について知ることによって、その人がとるであろうリサイクル行動や関連する態度についても予測することができる。

パーソナリティ特性も態度とも行動の予測変数として使われることがあるが、態度は対象と結びついており、「…に対する態度」というように常に対象との関連で記述されるが、パーソナリティ特性の場合は対象が特定ののではない。誠実なパーソナリティ特性を持つとは、何かに対して誠実であるというよりも、どんな対象に対しても、誠実であろうとすることを意味する。この点に関連して、パーソナリティ特性は交差状況的に一貫していることが期待される。したがって、「特性とは、特定の行動様式の傾向性のことで、諸状況を越えたその人の行動として表出するものである（Pervin, 1996, P. 61)」。つまり、人々の種々の状況における行動にみられる規則性や一貫性であり、ここでいう一貫性とは状況をこえて特性から生じるとされる行動が見出されることである。

つぎに Big 5 にいたるまでの特性論の歴史を簡単に振り返ってみよう。

1930年代に Allport, G. W. は特性の性質について、考察を深め、独自の特性論を打ち立てた。初期の論文だが、Allport (1931) の特性に関する考察は現在においても豊かな洞察に満ちている。Allport は数量化を必ずしも志向しなかったが、今日までつづくパーソナリティ特性論は「特性は数量的に評価可能である」という前提、教義をもっていることが特徴である。その嚆矢となったのが、Cattell, R. B., Gulford, J. P., そして Eysenck, H. J. らである。

彼らは、1950年代から1960年代にかけて特性論の地歩を固めた。彼らは多くのパーソナリティ検査を作成することをめざし、検査項目の因子分析によって、性格（パーソナリティ）の個人差を適切かつ情報縮約的に位置づける次元（ものさし）を見出した。しかし、因子数においては Cattell, R. B. の16因子 (Cattell, 1957), Eysenck, H. J. の2因子 (Eysenck, 1957, 後に3因子) というように様々であり、収束がみられなかった。それでも、外向性—内向性 (extraversion-intraversion), 情緒安定性—不安定性 (emotional stability-instability) という2次元の存在に関してはほぼ合意が得られたが、特性の数に関しては議論が続くことになった。なお、彼らの研究に対して、個性記述を無視し、共通特性のみを強調したパーソナリティの記述にすぎないとする質的接近からの評価もあるが、正しい評価ではない。例えば、Cattell は、個性記述の測定方法論（独自得点を ipsative score と名づけた）に取り組むとともに状況、役割などの外的要因をモデルに取り入れるアイディアを持っていたことはあまり知られていない (Cattell, 1996)。

この特性論に対して、1968年に発刊された Mischel, W. の 'Personality and assessment' を発端にして、1970年代から80年代にかけて、「人の行動は相対的に一貫的（人格要因に起因するとみる）か、時と場所を越えて変化するものか」、「安定的な広義な反応傾性概念としてのパーソナリティ特性概念は支持しうるのか」の Person-situation debate（「人か状況か」論争）がまきおこった。West (1983) が1970年代を指しているところの、パーソナリティ心理学の「危機の時代」であった。

Mischel, W. はパーソナリティ特性測度と行動の客観的測度との相関 (personality coefficient という) が0.30を越えないことを理由に、行動は状況規定的であり、パーソナリティ特性の関与は少ないと主張した。Epstein (1979) は項目の集積 (aggregation: 要するに合計のこと) によって、personality coefficient が0.30を突破しうることを提唱した。心理測定学サイドからすれば、特に古典的テスト理論の信頼性と妥当性の議論、bandwidth-fidelity dilemma などについて初歩的な無理解をふくんだ議論であると、1980年代後半にこの議論に接した筆者は皮肉っぽく感じていた。筆者は「行動の相対的一貫性 VS. 特殊性」の問題については実証データで解決する問題でなく認識論的問題をはらむと考えるが、これらについては機会があれば稿を改めて論じたい。

この「人か状況か」論争は、現在次のような折衷的見解で一時落ち着いているようである。す

なわち、人の行動は所与の設定下においては適度に時間を超えて一貫している。さらに状況間でも、それらの状況がよく特定化されており、心理学的に意味のある共通した性質をもつ状況群であれば、適度に一貫性が見出せるということである。

この論争は、結果としてパーソナリティ心理学の危機ではなく、新たな動向や発展を生み出した。パーソナリティ特性を単独に優越させて人間理解をはかる傾向を廃させた功績は記憶されるべきであろう。多重決定系に対して、単独要因を優越させて予測や理解を試みることは、あらゆる科学の初期的段階に見られがちな過ちである。

新たな動向の代表は、特性論に対峙する形で、A. Bandura や論争の大立役者である W. Mischel らがうちたてた social-cognitive approaches である。現代のパーソナリティ理論においては、5 因子論に代表される Trait/dispositional approaches と social-cognitive approaches が 2 大勢力となったのである (Cervone, 1991)^{3,4,5}。

次に 5 因子モデルについて簡単に見ておこう。

5 因子モデルと特性理論

Big 5 Factors あるいは Five Factor model は、次の因子からなる。McCrae と Costa らの用語法を中心に、そのファセット名（：以下に記述）と具体的イメージ（—以下に記述）をあげておこう (Costa & McCrae, 1994a)。

神経質傾向 (Neuroticism)：不安、敵意、抑うつ、自意識、衝動性、傷つきやすさ—この因子に高い得点を持つ人は神経質、情緒的に不安定、不安や罪悪感をもちがち、心配性で気分屋である。逆は情緒的に安定しており、穏やかでのんき、気楽な人である。

外向性 (Extraversion)：温かさ、群居性、主張性、活動性、刺激追求性、ポジティブな感情—いわゆる外向であり、社交的で話好き、楽しいことが好きである。その反対は、でしゃばりでなく、静かで、受動的で、控えめで無口である。

経験への開放性 (Openness to Experience)：空想性、審美性、感情、行為、価値—この因子に高い得点を取る人は創造的で好奇心が強く、文化的なものに関心を持つ。

調和性 (Agreeableness)：信頼、実直性、愛他性、応諾、慎み、優しさ—気立てがよく、温かで、協調的で、信頼でき、人を支援する。反対は、おこりっぽく、理屈こねで、同情がなく、疑い深く、非協調的でうらみをもちがちである。

誠実性 (Conscientiousness) : 競争, 秩序, 良心性, 達成欲求, 自己規律, 慎重さ — 責任感があり, サボらず, 達成的である。反対は, 無責任, 注意散漫, 衝動的でなまけもの, 頼りにできない。

岡本 (1999) は, Big 5 (Goldberg らが命名した) が何を表しているかについては, いくつかの考えがあることを指摘した。それらは, ①人間の人格個人差そのものの構造, ②人間の人格認知の構造 (暗黙裡の人格観の構造), ③辞書的な人格描写語の構造である。最近の日本においては①が中心であり, 付随的に③の研究が盛んである (辻, 1998 参照)。このように, Big 5 をパーソナリティの特性次元とする見方は世界的には決して圧倒的主流ではない。Goldberg は, 辞書的な語彙論的アプローチを代表する研究者で, 特性そのものを認めない。対人認知次元の因子分析から始まったという経緯から, 本来無関係なところからの転用であるといった批判もある。積極的特性論者である McCrae と Costa らは, このような限定的な特性の扱いに反対で, 近年の行動遺伝学の成果 (たとえば安藤, 2000) のようなパーソナリティ特性の遺伝性を示唆する研究を挙げて反論する。過去とは違い (かつて Eysenck は遺伝性を強調したが, 遺伝そのものへの誤解もあいまって, その先見さも受容されなかった), 遺伝子工学や遺伝医学, 脳科学などの長足の進歩と共に, 行動遺伝学で一貫した結果が生じていることなど, パーソナリティ特性の生物学的基盤がしだいに確度をましてきているのを今後の議論の前提としてぜひ踏まえておきたい。

5 因子モデルから 5 因子理論へ

パーソナリティの 5 因子モデル (Five factor model: FFM) は, パーソナリティ特性の共変動に関する一つの実証的一般化であって, かつて混乱のあったパーソナリティ次元に統一性をもたらしている。しかし, McCrae と Costa によれば, この 5 因子モデルも, モデルに関する諸研究知見も, パーソナリティ理論というよりも記述であって, 理論ではない。彼らはパーソナリティを一つのシステムとしてみており, その「システム全体と要素の定義, 規定を与え, そのシステムがどのように組織化され相互作用し, 発達していくかを説明するための理論」の構築をめざした。彼らの提唱した 5 因子理論は, かかる要件を備え, パーソナリティに関する現在の知見と一貫した理論を構築する試みである。

以下ではその内容をできるだけ筆者の予断や変形を加えない様に心がけて紹介をこころみた。おそらく, 内容の個々の部分に対して斬新さを認める人はいないであろう。前から知っていたよと誰もが言うであろうが, 広範な内容をカバーし, まとまった形で明確な理論的言明を試みたものは, 筆者の知る限りない。この 5 因子理論は他の理論的言明やアイデアを比較可能とし, 爆発的増加をみせる実証の成果を評価し, これまでの知見と一貫する理論構築を目指して, 明確な

理論的言明による定式化を試みたものといえよう。筆者は、彼らの5因子理論が、種々の研究的指針に優れたメタ理論であると考え、その概要を紹介する^{6,7)}。

5 因子理論はパーソナリティ過程をシステムとして定式化したものである

5 因子理論は、いわば5つの要素間のシステムとして、パーソナリティ（のあり方）を捉えようという試みであった。以下、彼らの5因子理論の理解を試みるが、そのために必要なシステムの発想のポイントを押さえておこう。

システムということは、個々の要素の状態や内容が分離的に特定化でき、要素間に何らかの対応関係があることを意味している。すなわち、システムとは「相互に関連しあう要素の集合からなる全体」である。そして個々の要素の変化が他の要素の状態に影響を与え、ある状態に落ち着いたり、変化していくことを記述し予測することをめざすものである。一部分の変数（システムの一部の要素）をみているだけの場合よりも、重要な変数をなるべく押さえたシステムとして対象をみることによって、より多くの知見が得られることを期待するものである。

ある対象をシステムとしてみるということは、複数の変数が結びついたものとして捉えるということであるから、まず、対象がどのような変数の集まりであるかを明示しなければならない。パーソナリティをシステムとしてみる場合、被験者がだれであっても見出せるもの、そして時間的経過を超えても存在するであろうものはなにか？ を追求し、特定化を試みる（システム理論を導入した先達である社会学では、このような“変換”によっても変わらないもの、それを構造とする。その発想を筆者が借りて解釈した）。パーソナリティシステムで構造的な枠組みを探してみると、基本的傾向性、特有的適応、自己概念、客観的成育史、外的影響因の5要素（さらに生物的基礎をくわえる）とその中に含まれる下位変数、および要素間の力学的関係ということになる。

次に、5因子理論があつかうパーソナリティシステムの5つの要素をまず詳述・詳説することにしよう。

5 因子理論を構成する諸要素

パーソナリティシステムの要素は、5要素からなる「基本的傾向性」、「特有的適応」、「自己概念」、「客観的成育史」、「外的影響因」である。なお、1999年に追加された生物的基礎（biological bases）は基本的傾向性である5つのパーソナリティ特性の遺伝的基礎を示唆するものである。システムを形成する要素であるが、詳述はされていない。Fig. 1はパーソナリティシステムを構成する各要素間の関係を示している。

McCraeとCostaによれば、全てのパーソナリティ理論は、これらの要素、要素間の相互関

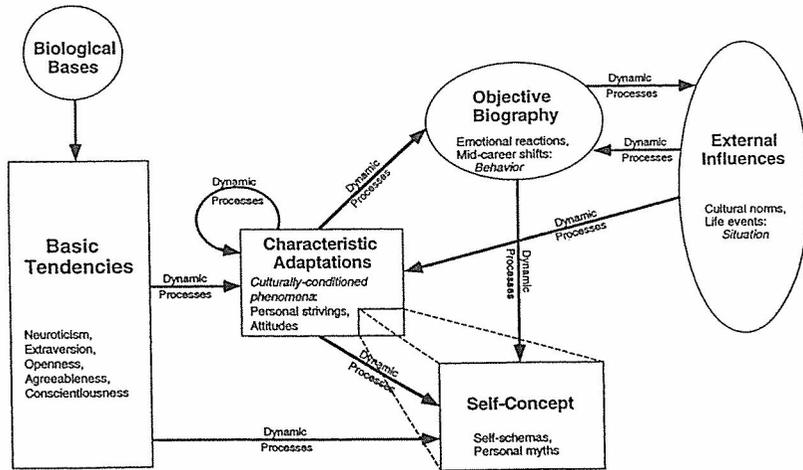


Fig. 1 A representation of the five-factor theory personality system. Core components are in rectangles; interfacing components are in ellipses. Quoted from McCrae and Costa (1999).

係に関する何らかの言明で構築されているという (McCrae & Costa, 1996)。Table 1 は、McCrae と Costa (1996) が提示した 5 つの要素のおのおので特定化される変数の「一部」のリストである。試みに各自の研究枠組みの主要概念や変数がどこの要素に分類されているのかを確認されたい。彼らは、パーソナリティ理論を作り上げるということは、これらのボックスの内容を詳説し、さらにこれらのボックスを結び付ける因果の矢印を特定化することであるとした。

以下では、McCrae と Costa (1996) の記述を抄訳したものに、コメントを加えながら、5 つの要素の特徴を明らかにしていく。

① basic tendencies (基本的傾向性)

基本的傾向性の説明として、McCrae & Costa (1996) はつぎのように記している。

基本的傾向性は、パーソナリティの普遍的な、なまの素材である — それらは一般的には観察されるというよりもむしろ推測される能力や傾性である。基本的傾向性は遺伝的で、初期経験によって刻印づけられたり、病気や心理的妨害によって変更されるかもしれないが、個人の人生のあらゆる段階においても、個人の将来の可能性や方向性を決定づける。Rogers (1961) はパーソナリティのこの側面を有機体 (the organism) とよび、多くの理論家にとって、基本的傾向性は個人の真なる核であり、仮面の下の真実のその人そのものなのである (Monte, 1977)。Jung (1933) は元型の中に入れるだろうし、Freud (1933) は生と死の本能を加えることだろう。われわれにとっては、最も重要な基本的傾向性は、パーソナリティ特性である。それは行動の一貫性とか頻度としてではなく、抽象的な傾向性として解釈される。(1996, p. 66 ~ 69)

Table 1 Examples of specific Content in Five Categories of Personality Variables. Quoted from McCrae and Costa (1996).

<p><i>Basic tendencies</i></p> <ul style="list-style-type: none"> Genetics Physical characteristics <ul style="list-style-type: none"> Sensory-motor capacities Health, physical abilities Age, race, gender Physical appearance Cognitive capacities <ul style="list-style-type: none"> Perceptual styles Operant, respondent learning ability General intelligence <ul style="list-style-type: none"> Verbal ability Spatial ability Specialized talents Physiological drives <ul style="list-style-type: none"> Needs for oxygen, food Sexual drive and orientation Focal vulnerabilities <ul style="list-style-type: none"> Alcoholism-proneness Manic-depressive tendencies <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>Personality traits</p> <ul style="list-style-type: none"> Neuroticism <ul style="list-style-type: none"> Anxiety, angry hostility, depression Extraversion <ul style="list-style-type: none"> Warmth, gregariousness, assertiveness Openness to Experience <ul style="list-style-type: none"> Fantasy, aesthetics, feelings Agreeableness <ul style="list-style-type: none"> Trust, straightforwardness, altruism Conscientiousness <ul style="list-style-type: none"> Competence, order, dutifulness </div> <p><i>Characteristic adaptations</i></p> <ul style="list-style-type: none"> Acquired competencies <ul style="list-style-type: none"> Language, general knowledge Schemas and strategies Social skills <ul style="list-style-type: none"> Etiquette, tactics of manipulation Technical skills Attitudes, beliefs, and goals <ul style="list-style-type: none"> Religious, moral values Social, political attitudes Tastes, preferences, styles Vocational interests Personal projects, tasks 	<ul style="list-style-type: none"> Learned behaviors <ul style="list-style-type: none"> Habits Daily routines Hobbies Interpersonal adaptations <ul style="list-style-type: none"> Social roles Relationships Perceptions of others <p><i>Self-concept</i></p> <ul style="list-style-type: none"> Implicit, explicit views of self Self-esteem Identity Life story, personal myth <p><i>Objective biography</i></p> <ul style="list-style-type: none"> Overt behavior Stream of consciousness Life course <ul style="list-style-type: none"> Career paths Historical accidents <p><i>External influences</i></p> <ul style="list-style-type: none"> Developmental influences <ul style="list-style-type: none"> Parent-child relations, practices Peer socialization Education Traumatic events Macroenvironment <ul style="list-style-type: none"> Culture, subculture Historical era Family, neighborhood, vocational groups Microenvironment <ul style="list-style-type: none"> Situational constraints Social cues Motivational press, opportunities Reinforcements, punishments
---	---

基本的傾向性は、一般的には観察されるというよりもむしろ推測される能力や傾性であるという意味で潜在変数 (latent variables) である (McCrae と Costa は、彼らがその実在を信じて疑わないところの5因子を位置づけている)。McCrae と Costa は、1996年の論考では、パーソナリティ特性の生物学的基礎である遺伝性は認めてはいるものの強く打ち出していない。その後、行動遺伝学の知見に後押しされるように、1999年の論文では、biological basesとして、Personality system に組み込んでいる。その図を Fig. 1 に示す。Fig. 1には、生物学的基礎 (biological bases) から基本的傾向性にパス (矢印、すなわち影響がある) が引かれている。なお、McCrae と Costa が Rogers など幾人かのパーソナリティ理論家が位置づけた基本的傾向性についての例を挙げているのは、このメタ理論的構図で、古典的理論や種々のパーソナリティ理論で扱われてきた変数や概念を包摂しようとする姿勢の現われである。

② characteristic adaptations (特有的適応)

特有的適応は、個人と環境の交互作用からもたらされたところの、獲得されたスキル、習慣、態度、対人関係であり、基本的傾向性の具体的な現われである。多血質 (full-blooded) であるという個人の描写は、個人面接からうかがいあがるものであり、現在の関心と人間関係を強調するものであり (Klinger, 1977)、パーソナリティを条件づけるものであり (Thorne, 1989)、「持っているもの」よりもむしろ「していること」(Cantor, 1990) が特有的適応の説明である (1996, p. 69)。

基本的傾向性と特有的適応の区別は重要であるが、混同しやすい点に注意しなければならない。基本的傾向性は、本人が生まれつき保持しているものに近いが、特有的適応は、後天的に本人と環境との相互作用の中で獲得したものである。Allport (1937) の「パーソナリティとは個体の中にある動的、有機的なまとまりのことである。それは精神身体的なシステムであり、環境に対して個体独特の適応を導く」というパーソナリティの定義があるが、これを借りて換言すると、コアとなる基本的傾向性が導いたところの個人特有の環境への適応として獲得された各種の傾性を、パーソナリティの中の特有的適応と考えればよい。

特有的適応の例として、態度 (attitude) をあげてみよう。Allport (1935) は、「態度は精神的神経的準備状態であり、経験を通じて組織化され、関連ある対象や状況に対するその個人の反応に指示的力動的影響を与えるものである」と定義しており、経験を通じて態度が形成されることを強調している。その意味では、まさに特有的適応である。基本的傾向性との関連としては社会的、政治的態度の一例としての権威主義 (authoritarianism) が代表的である。権威主義とは、権威への服従、エスニックマイノリティへの敵意、右翼的ファシスト傾向をもつ態度特性で、パーソナリティとの関連が強く示唆されてきた。最近の研究では権威主義は開放性 (openness) と負の相関を示すことが示されている (McCrae, 1996)。権威主義はパーソナリティのうち認知的側面と関連していると考えられている。権威主義者は認知的複雑性が低い。つまり、世界を単

純で、ステレオタイプ化したカテゴリーを用いて知覚しがちで、あいまいさへの耐性がない。その対人的、社会的な表出であると考えればよい。

また、「持っているもの」よりもむしろ「していること」という、特性論に対峙する側の社会的学習理論の立役者の一人である Nancy Cantor の表現を借りているのは、特有的適応に、社会的学習理論、社会的認知理論の中心概念である plan, skill, competency, habit, personal project, personal task 等を含めようとする試みであることを示しているものである。さらに 1999 年の追加説明 (McCrae & Costa, 1999, p. 143-144) を引用しておく。

この FFT が注意を集中したものがこそ、基本的傾向性（抽象的な心理的潜在力）と特有的適応（それらの完全に顕在化したもの）の区別である。類似したものとしては、Wiggins (1973, 1997) の genotypic traits と phenotypic traits や McAdams (1996) の Level 1, Level 2 の personality variables がある。FFT の特徴としては、特性を基本的傾向性に位置づけたことである。FFT では、特性は行動のボタンではない。行動のボタンを導くプラン、スキル、欲求 (desire) でもない。FFT での特性は公の観察でも私的の内観でも直接接近可能なものでない。特性とはより深層の心理的存在（実在）で行動や経験から単に推測しうるものなのである。心理特性の自記報告型のテストも同様な推測に基づくものである。観察者による評定も同様である。（中略）

特有的適応（習慣、態度、スキル、役割、対人関係）は、基本的傾向性にも外的影響因にも影響を受ける。これらが、'特有的'であるゆえんは個人の持続した心理学的核の要因を反映したものであるからで、'適応'であるゆえんは、それらが絶えず変化する社会環境に個人を調和させるのに役立つからである。特有的適応とその有り様は、文化間、家族のあり方、ライフスパンのどこに位置するかで、不可避的に大きく変化する。しかし、人格特性はそうではない。Big 5 は通文化的に見出されるし、親子関係は、パーソナリティ特性にほとんど持続的な効果を持たず、成人期において、特性は安定的である。特性は環境の直接的影響下からは独立したものと見なさう⁹⁾。

③ self-concept（自己概念）

自己概念は、本来、特徴的適応の一部であるが、その重要性にかんがみ、別の要素として扱おうということである。すなわち現時点では、自己概念は、パーソナリティ過程、認知過程における機能的単位として扱われるべきということである⁹⁾。しかも、自己 (psychological self) の機能は生得的であっても、その内容は後の経験から形成されたものである（自己概念、自己に関する記憶の“なかみ”の由来を考えると納得できよう）。ゆえに特有的適応に分類できる。

自己概念は自己に関する知識、見方、そして自己評価からなり、それらは、種々雑多な個人史の諸事実から、人生に目的と固有の意味を与えるところの、人生物語 (life narrative) や個人的神話 (personal myth, McAdams, 1990b, 1993) に表現されたアイデンティティに至るまでのものである。一つの見方としては、ちょうど他者の知覚がそうであるように、自己概念は特有的適応である。しかし、パーソナリティの多くの理論に

における自己概念の重要性は、それを別個に扱うことを正当化するものである (McCrae & Costa, 1996, p. 70)。

これまで自己に関わる傾性概念である、自尊心、自己評価意識などを、単にパーソナリティ要因として、その合切袋に投げ込んでいた研究が多かったが、ここでは、そのような扱いを正当化しない。なお、自尊心維持の傾向が相互独立的な文化への適応として形成されているという文化心理学の主張からすると、外的影響因から自己概念へのダイナミックプロセスのパスをひくことになる。

④ objective biography (客観的成育史)

客観的成育史は、人が生を受け、生を終えるまでに、彼、彼女が感じ、考え、発言し、行為したことすべてからなるものである (Murray & Kluckhohn, 1953, P. 30)。心理学者が実験室で観察した外顕行動、患者がセラピストに語った自身の夢、人生の出来事に対する反応である恐れと歓喜、死亡記事に要約されるころの職業のキャリアは、すべて客観的成育史の側面である。多くの理論は、この成育史のカテゴリーの内容を、パーソナリティ心理学が予測を試みるところの結果変数 (outcome variables) としてみなしている (McCrae & Costa, 1996, p. 70)。

ただし、life story や personal myth は主観的であるゆえに前項の自己概念の下位要素として Table 1 の例に挙げられていることに注意したい。

⑤ external influences (外的影響因)

最後の要素が外的影響因で、すなわち心理的環境である。このカテゴリーに入るいくつかの変数は Table 3. 2 にリストアップされている。全体的状況、特定の状況の両方の水準における発達的影響と現在の状況を含む。もちろん、世界を個人と環境に区別することはいささか恣意的である。人々は、世界への自身の反応によって、その世界を形作るのを促進しようとするからである (Bandura, A. 1989; D. M. Buss, 1987)。

この表現には Bandura に代表される社会的学習理論の主張である 3 要素相互決定主義 (triadic reciprocal determinism) —— 人、環境、行動の 3 要素間が、相互に規定し合うという見方 —— を包摂しようとする姿勢を見て取ることが出来る。

ユニバーサルパーソナリティシステム (Universal Personality System)

の概要および図的表現

McCrae と Costa は、これまでのパーソナリティ理論で扱われてきたパーソナリティの要素 (elements) をなるべく取り上げるようにして、先に詳述した 5 つのカテゴリーにまとめあげた。

そして、その要素間の力学的関係を FFT パーソナリティシステムとして記述した。このパーソナリティシステムをユニバーサルと形容するのは、とりわけ万人に共通する（つまりは文化を越えても共通する）要素と力学過程であるということ、さらに全体的な有機的つながりをもつということを意味しているように筆者は解釈している。Fig. 1 には図式的に表現したパーソナリティシステムは、諸要素がどのように関連しているかを示唆している¹⁰⁾。

パーソナリティシステムの中核となる成分は、基本的傾向性、特有的適応、自己概念である。中核成分は長方形で囲まれている。実際には、自己概念は特有的適応の下位要素だが、先に述べたように、その重要性にかんがみ、別扱いとなり、点線で特有的適応から飛び出したかのような図的表現がなされている。楕円形で表した周辺の成分は生物的基礎、外的影響因、客観的成育史である。生物的基礎は、1996年の彼らの図式には登場していない。生物的基礎は重要であるが、その正確なメカニズムが明らかでないので、あまり言及しない。他の周辺の成分である、外的影響因は状況を構成し、客観的成育史は行動の特殊な例である。Fig. 1 は横断的だけでなく縦断的にも解釈ができ、人格発達（基本的傾向性と特有的適応における）とライフコースの展開（客観的成育史）を示す。Table 2 にはそれらの実例を示している。

Table 2 Some Examples of FFT Personality System Components. Quoted from McCrae and Costa (1999).

Basic tendencies	Characteristic adaptations	Objective biography
Neuroticism		
N 3: Depression (a tendency to experience dysphoric effect—sadness, hopelessness, guilt)	Low self-esteem, irrational perfectionistic beliefs, pessimistic attitudes	“Betty” (very high N 3) feels guilty about her low-prestige job (Bruehl, 1994).
Extraversion		
E 2: Gregariousness (a preference for companionship and social stimulation)	Social skills, numerous friendships, enterprising vocational interests, participation in sports, club memberships	J.-J. Rousseau (very low E 2) leaves Paris for the countryside (McCrae, 1996).
Openness to Experience		
O 4: Actions (a need for variety, novelty, and change)	Interest in travel, many different hobbies, knowledge of foreign cuisine, diverse vocational interests, friends who share tastes	Diane Ackerman (high O 4) cruises the Antarctic (McCrae, 1993–1994).
Agreeableness		
A 4: Compliance (a willingness to defer to others during interpersonal conflict)	Forgiving attitudes, belief in cooperation, inoffensive language, reputation as a pushover.	Case 3 (very low A 4) throws things at her husband during a fight (Costa & McCrae, 1992 b).
Conscientiousness		
C 4: Achievement Striving (strong sense of purpose and high aspiration levels)	Leadership skills, long-term plans, organized support network, technical expertise	Richard Nixon (very high C 4) runs for President (Costa & McCrae, in press).

それでは、彼らの5因子理論の定式化を1996年の記述を抄訳して紹介しよう (McCrae & Costa, 1996, p. 72 ~ 75)。

パーソナリティの5因子理論の定式化

1. 基本傾向性 (Basic Tendencies)

- 1 a. 個別性 (individuality) : すべての成人は、パーソナリティ特性の連続体上に、それぞれの位置を占めることによって特徴づけることができる。それらのパーソナリティ特性は思考、感情、行動のパタンに影響を与える (McCrae, 1993; McCrae & Costa, 1990)。
- 1 b. 起源 (origin) : パーソナリティ特性は外生的な基本傾向である。特性は実質的に遺伝的であるとすると多くの証拠があるが (Tellegen, et al., 1988), 共有環境の影響力によっては影響をうけない (Plomin & Daniels, 1987)。現時点では、非共有環境の影響力は仮説にとどまっている。そして、記述の簡潔性から省略されている。パーソナリティ特性からの矢印は引かれるが、パーソナリティ特性に向かって引かれることはない^{11, 12)}。
- 1 c. 発達 (development) : 特性は子どもの頃から発達し、青年期に成熟した形式をとる。その後は認識上は個人内でそのまま保持されて安定的である。データの示唆するところによれば、大半の特性は30歳代で十分発達しきる (Costa & McCrae, 1994)¹³⁾。
- 1 d. 構造 (structure) : 特性は狭く、特殊なものから、広範で一般的な傾性 (*Neuroticism, Extraversion, Openness to Experience, Agreeableness, conscientiousness*) へと階層構造をなしている。 (Costa & McCrae, 1995)。

2. 特有的適応 (Characteristic adaptations)

- 2 a. 適応性 (adaptations) : 時を越えて、個人は、性格特性や初期環境と整合するかたちで、思考、感情、行動のパタンを進化させることによって、環境に反応し続ける。外向的な人は社会的クラブに参加しダンスを学ぶ。人になじめない人はシニカルな態度を醸成する。
- 2 b. 不適応 (maladjustment) : いかなる時でも、適応は、文化的価値や個人の目標から最適ではない。特に、人生の問題がパーソナリティ特性と結びつき、重大な苦悩を引き起こしており、現実を誤って知覚している場合、人格に関連した障害として見て取ることができる (McCrae, 1994)。
- 2 c. 可塑性 (plasticity) : 特徴的適応は、生物学的成熟、環境内の変化、計画的な働きかけへの反応として、時間とともに変化する。

3. 客観的生育史 (objective biography)

- 3 a. 多重決定 (multiple determination) : あらゆる所与の瞬間の行為や経験は、状況によ

て引き起こされた特有的適応の複雑な関数である。本を読むことは知覚的、認知的スキルを利用している。そして、孤独を求める内向性の欲求を満たしているかもしれない。知的刺激を求める開放性に関連する欲求に根差すかもしれない。そこには、行動と単一の特性との一対一対応を見出すことはまれである（Ahadi & Diener, 1989）。

- 3 b. ライフコース (life course)：個人は計画、スケジュール、目的を持っている。それらは、長期間で行為を組織化するもので、パーソナリティ特性に整合するかたちをとる (cf. Murray & Kluckhorn, 1953)。

4. 自己概念 (self-concept)

- 4 a. セルフスキーマ (self-schema)：人は意識化可能な自分自身の認知的—感情的見方を維持しようとする。自己概念は、特有的適応の下位集合で、特性、他の特有的適応性、客観的生育史に影響される。図内の矢印は、自己概念それ自身特有的適応の下位集合で、パーソナリティ特性、他の特有的適応、そして客観的成育史の影響をうけることを示している (McCrae & Costa, 1988)。
- 4 b. 選択的知覚 (selective perception)：情報は、自己概念の中で選択的に表現される。そのやり方とは、i) パーソナリティ特性に整合するように；ii) その個人に一貫的な意味をあたえるように、である。

5. 外的影響因 (external influences)

- 5 a. 相互作用 (interaction)：社会的、物理的環境は人格傾向と相互作用し、特有的適応を形成する。また、特有的適応と相互作用することで、行動のながれ (flow) を調整する。
- 5 b. 統覚作用 (apperception)：個人は、人格特性に整合するかたちで、環境に注目し、解釈しようとする。
- 5 c. 相互関係性 (reciprocity)：個人は、環境に対して反応することで選択的に環境に対して影響を与える (Snyder, 1983)。個々人は、集会的に、パーソナリティ特性の表出の選択肢を供する社会と文化を作り上げている。

6. 力学過程 (Dynamic Processes)

- 6 a. 普遍的ダイナミクス (Universal dynamics)：適応を創出し、思考や感情、行動に表出する個人の進行中の機能は、部分的に全体的な認知、感情、意志的メカニズムの調整を受けている。知覚、学習、プランニング、選択などがその例である。
- 6 b. 区別的ダイナミクス (Differential dynamics)：いくつかの力学過程は基本傾向から区別的に影響を受ける。開放的な人は、現存の適応が適切であっても新しい適応を作り出そうとするし、高度に神経質な人は、自己概念の中のネガティブな情報を強調しようとする。

全ての特性は、潜在的に主となる特性であり、他の特性の表出を決めていく (Costa & McCrae, 1993)。

以上の5因子理論の定式化は、McCraeとCosta自身がいうようにほとんど驚かれるような目新しい内容ではない。それらは、多くのパーソナリティ理論に共通して見出され、様々な異なる文脈で指摘されてきたものである。5因子理論では、「人間の生の営みは、パーソナリティの5因子次元のどこに位置するかによって (どの特性が突出しているかの特徴によって)、心理的に水路付けられる」という前提を置いている。

5因子理論は、メタ理論 (理論をうみだす理論) である。5因子理論理論の定式化に刺激されて新たな研究方向や付加すべき変数を見出したり、既存の知見をメタ的枠組みから再評価することができれば、5因子理論の意義は大いにあると判断できる。

力学過程

他の要素との間の相互作用の性質を特定化したものを、力学過程 (dynamic process) とよんでいる。このようなシステムの下位要素間の連関、力学的過程こそが心理学理論の生命である。Table 3にはその例を挙げているが、いまだ不十分であり、今後はその分類学や、各過程の詳細を明らかにすることが必要に思われる。システムの作動に関して、McCrae & Costa (1999) の記述の抄訳 (p. 144) を以下に示しておく。

例えば、客観的成育史から自己概念にささる矢印は、私たちは自分が成したことから (自己) 観察することから、自分とは何かを、部分的にしる学ぶということを示唆している。自分のことを解釈することには、社会的比較、選択的注意、防衛的否認、潜在学習など認知-情動系過程のあらゆる全ての過程を包含する。進化心理学者 (Buss, 1991 のような) はまた、適応における特定問題の解決のために進化してきた多くの心理学的機構がありそうだと強調する。

Table 3 Examples of Dynamic Processes in Personality. Quoted from McCrae and Costa (1996)

Information processing
Preception
Operant conditioning
Implicit learning
Coping and defense
Repression
Displacement
Positive thinking
Volition
Delay of gratification
Rational choice
Planning and scheduling
Regulation of emotions
Emotional reactions (e. g., fight or flight)
Expression/suppression of affect
Hedonic adaptation
Interpersonal processes
Attachment and bonding
Social manipulation
Role playing
Identity formation
Self-discovery
Search for meaning
Self-consistency

McCrae と Costa らはこの力学過程こそが理論の生命といいながらも、詳述はしていない（Table 3 に力学過程の諸例をあげている）。そこで、力学過程に関して理解を進めるために、鈴木（1998）の研究を要約して紹介する。鈴木乙史も、パーソナリティのシステムの理解をしている（鈴木，1998，p. 6-11.）。

まず鈴木がいうところの「認知—行動系」について説明する。同じ環境下であっても人は同じ行動をしないのはなぜだろうか。個性や個人差は、環境の知覚（認知）において現われる。個人によって注目しやすいものとそうでないものがあるのは、選択的注意（不注意）による。この知覚は、何かを感じたり（感情）、考えたり（思考）、何かをしたくなる内的プロセスである。感情、思考、欲求が生じ、これらの内的過程を経て、行動が生じる。行動をすることは環境に働きかけることであり、環境の変化は認知を変化させる可能性を生むとする。人は絶えず環境を主体的にうけとり、環境に働きかけ、環境を変化させながら生きていくとした¹⁴⁾。認知—行動系の個人差においては生得的な傾向が基盤となると考えるが、その後の経験によって発達・変化すると考えられる。

さらに人間は自分自身を対象視（I→me）することができるが、自己が自己自身を意識の対象とする「自己意識」は、2歳頃から現れると考えられている。「私はこうしたいけれどそうはしない」、「私はとても悲しいけれどもう赤ちゃんじゃないから泣かない」というように、私（自己意識系）が私（認知—行動系）を制御する。自己意識は認知にも影響を及ぼすことは先に選択的注意で指摘した通りである。鈴木は、知的能力はこれら2つの系に影響を与えていると考えられるが、まだ、研究は十分なされておらず、その関係は明らかでないとしている。また、個人によって2つの系間の対応が異なり、ある人は、自分の感情、思考、欲求を意識化しやすいのに対して、そうでない人もいる。自己意識の中には、自分にとって重要な他者や過去の出来事、将来の夢が含まれる。後年にはその人の価値観・人生観・死生観が自己意識のなかに結晶化するように形成され、中心的な働きをするようになる。これは、自己物語を研究することの重要性を物語るものではないだろうか。鈴木が言う自己意識系は5因子理論でいうところの客観的成育史との力学過程をもつことは直ちに仮設できよう。

さて、Table 2によれば、その人の客観的成育史は、基本的傾向性と特有的適応の作動過程の結果として記述できるということであった。これが意味するところは、5因子理論は測定的研究だけに限らず、事例研究においても（例えば、パーソナリティシステムの諸要素を用いたケース理解などに）適用可能であるということである¹⁵⁾。事例研究において、パーソナリティ過程の機能単位として、先の諸要素（基本的傾向性、特有的適応、自己概念、客観的成育史、外的影響因、そしてそれらの力学過程）をまず押さえるべき視点とすることは、知見の整理に役立つであろう。このパーソナリティシステムや諸要素を雛形にして研究枠組みを作り上げることは、諸変数を定義し、明確化し、力学的過程を仮定する場合に有用と思われる。むしろ、事例理解にこそ明確な応用が期待できるのではないだろうか。事例研究技法に熟達した研究者の名人芸に、5因子理論

の背景にあるシステムの思考をくわえることで、有意義な知見が発掘されるであろう。

なお、この接近を主観的と批判するにはあたらぬ。主観的であるからこそ、パーソナリティシステムを理解するための数量的接近の限界を超えることができる。パーソナリティシステムのシステム性を数量的な接近によって実証するには、いくつかの問題点があると予想される。単に Fig. 1 をパスダイアグラムに見立てて、構造方程式モデリングなどをすれば簡単にかたがつくような問題ではない。パーソナリティシステムを数量的に実証しようとする際に生じる問題に関しては別の機会にのべたい。

5 因子理論をめぐる最近の話題

(1) 進化心理学との関係

進化心理学は、1990年代の心理学の新たな動きである。進化の過程で適者生存だった特性が認知、感情・情緒システムを形成したとする。意識、言語本能の進化的説明、集団生活への適応のために獲得された心的メカニズム（抜け駆けをした他者をすばやく検知する、社会的認知のバイアスやステレオタイプも適応価を持っていた）などが議論されている。人間のバイオロジカルな側面は進化の産物であり、「こころ」も例外でないという進化心理学の主張に関しては積極的に肯定する研究者が増えてきた。こころの種々のしくみが、適応のための機能を果たすものとして獲得されたと前提すること（ただしそれは太古の時代における生存のための適応機能）は、今後の心理学に大いに影響をあたえるであろう。

5因子理論やパーソナリティ特性論にも進化心理学の影響が著しい（Buss, 1991）。たとえば、Big 5 に関して、進化心理学サイドからは Big 5 因子の適応価に関する解釈などが提出される。しかし、外向性が有利ならば、何故に皆が外向的でないのか。しかし、自然選択と生殖選択による進化の説明は種全体に共通する器官的特徴を説明するには有効だが、種内のバラツキを説明はしない（進化は自然選択や生殖選択によってのみ作動するのではないが）。そこで異なったパーソナリティ特性を持つ個々人において、生存と生殖などの課題に各特性が役立つという議論がある。配偶者を得るために外向的な人は眼をひこうとするし、協調的な人は愛情を表現し、誠実性の低い人は、策略を巡らして相手の嫉妬心を駆り立てる…。

さらには、個人差の存在が共同性を支える意味をもつという解釈もなりたつ。ヒトは他の生物にくらべ自然の猛威に耐える身体的能力が弱い。そこでヒトという生物は、脳の進化の過程で、自己意識、他者の意図を推測する能力など他者と共同することを可能とする能力をえたと考えられる。脳の進化は、ヒトに共同性をもたらしたのである。能力、気質の個人差にもとづいて効果的に営まれる共同作業や共同生活によりヒトは生存確率を高めてきたのかもしれない。同じような考え方、行動様式をもつ人ばかりの組織は、たとえ平均的に優れた能力をもつ個々人からなる場合であっても、環境の激変に対して適応力をもたないといわれる。つまり、個々人にそれぞれ

異なった能力や気質の特徴があることが、個々人にニッチを占めさせ、同時に集団自体としては種々の個人差の存在が包括的適応度をあげるのに役立つのだと考えることもできる。

とはいえ、今日の「個人差」をあつかうパーソナリティ論への適用としては、今のところは「見てきたような嘘をいっている」に近い印象を受ける向きが多いと思われる（太古のヒトの適応課題がなにかを現時点で特定することが難しい）。脳神経生理学、行動遺伝学との接点をもつパーソナリティ理論が比較心理学や進化心理学と共同する成果を今後期待したい。

（2）行動遺伝学との関わり —— 特にパーソナリティ特性の遺伝性について

これまででも外向性、神経質傾向に関しては遺伝的であるとされている。なお、ここで遺伝的であるというのは、或る特定の病気が遺伝規定的であるというのと同じ意味ではない。最近、その他の因子（パーソナリティ特性の個人差）も遺伝的であるというデータが出てきたが、5因子以外の narrower な特性に関しても研究が拡大していくだろう。5因子理論のシステム中の外生変数である生物的基礎は、遺伝によって規定された脳内構造に関わる部分であるといえる。だが、その正確なメカニズムが、発達の、神経解剖学的、精神生理学的には特定化できていない。今後、パーソナリティの表出の差異をうみだす脳内メカニズムがより解明されることが待たれる。

（3）特性論は循環論理におちいらぬ

ここでは特性論が循環論理であるという批判に対して、McCrae & Costa (1999) の考えを検討しておく。まず循環論理は同義反復のワナに陥ることは、よく知られている。パーソナリティ特性に関しても、「あの人はいろんな会合や集まりに顔をだしたりするのは、外向的だからよ」というのは、一見循環論理に見える。しかし、この人の外向性は、遺伝的基礎にもとづく素因があり、生物的基礎があると想像される場合ならば、循環論理ではない。つまり、パーソナリティ特性が生物的基礎を持つならば、生物的基礎のないその他の変数から説明されない外生変数として、あるいは何らかの行動や変数を説明するための独立変数として位置づけることが出来るので、循環論理のそしりを受けることもなくなる。ここで、彼らの論述を引用しよう。循環論理ゆえに個人理解に役立たないという批判に対する回答として記述されている箇所である。測定という表層的な手段ではその人を理解できない、測定結果に個人のすべてを還元するのは好ましくないという特性論を批判する立場にたって読まれると面白いと思われる。また、可能性や統計的確からしさを予測することと、特定事象を予測することの区別についての記述も含めておいた (McCrae & Costa, 1999, p. 149)。

全ての人は、どこかの側面で、どの他者とも似ていないという (Kluckhohn & Murray, 1953) ことは疑うべきもない真理であるが、他の理論同様、この点に関してFFTは何も言うべきことはない。科学的見地からはそれは誤差分散である。ここでもっとも強調すべきは、パーソナリティは個人を理解する上で無関係

であるということの意味しないということなのである。

臨床や人事心理学の典型的な適用として、種々の指標のセットからパーソナリティ特性を推測したり、個人のパーソナリティプロフィールからライフヒストリーを解釈したり、将来の適応状態を予測したりすることから、事例の理解が得られる。これらのことは循環論理の過ちをおかしているのではない。もし、妥当な測度が用いられたなら、特定化された特性は、それ以上の「意味」、すなわち所与の情報を越えることを解釈者に許容する「意味」をもたらしてくれる。回答者が陽気で元気のよいことがわかれば、われわれは外向性であることを検知し、経営やセールスの職に関心をもつ可能性が高いことを推測できる。しかしながら、現在の職を言い当てることは非常に困難である。ちょうど進化理論が、種の進化を前もって言い当てることよりも現存する主な機能を説明するには適しているのと同様に、パーソナリティのプロフィールは個人が将来どうするのかについて特定の予言をするよりも、そのひとのこれまでの生活 (a life) を理解するのに有用なのである。将来どうなるかは、本質的に、複雑系で混沌系 (complex and chaotic system) なのである。

定式化3a多重決定は、特有的適応と行動との一対一対応がまれであることを指摘している。同じ事は、特有的適応とその背後にある特性との関係についても言える。したがって、パーソナリティプロフィールがよくしられている場合でさえ、個人の行動を解釈することはやや投機的な技術である。

5 因子理論および5因子モデルの今後の展開

McCrae と Costa は、今後奨励されるべき5因子の下位理論として、

- 1) 基本的傾向性 (その因子と下位特性) を定義する。
- 2) 具体的な生物学的基礎を特定化する。遺伝子から、脳の構造と機能にいたるまでである。
- 3) 力動的過程 (防衛, 認知スタイル, プランニング, スケジュールなど、それらは5因子にそれぞれ個々別々に影響をうけたもの) を特定化する。
- 4) 因子と関連している特有的適応 (興味, 役割, スキル, 自己イメージ, 精神病理的症狀) をカタログ化して、それらがどのように基本的傾向性を反映しているかを説明する。
- 5) 因子のライフスパンでの発達, ライフコースにおける客観的反映, 人生物語における主観的表現を説明すること。

を提示している。それ以外に Costa & McCrae (1996: 注7) は、文化的多様性が特性の表出をどのように形作るか? 特性と欲求, 動機間の概念的接合はなにか? 5因子以外の追加因子が人格障害を説明するために必要か? 同じ個人内の異なる特性の表出を調和させる心理過程とはなにか? なども挙げている。さらに Big 5 自体の問題, 果たしてパーソナリティ特性を記述するのに5因子で十分であるかという検討が必要である。McCrae と Costa 自身も5個というのはマジカルな数字ではないことを言明している。5因子という因子数が信仰的に保持されるべきであると主張しているのではなく、あくまで実証結果が5因子に収束しているだけにすぎないとした。実証研究の結果, 5因子以外に修正されるならば, 受容したいと述べている¹⁶⁾。

5 因子理論の科学論的評価

5 因子理論に対して、科学論的評価を試みよう。まず、良き理論の 5 基準（McBurney, 2001）,

- ① 正確であること（どちらともとれる、何を言っているのかわかりにくいという曖昧さをへらす）
- ② 検証可能性がある
- ③ 包括性がたかい
- ④ 記述が簡潔である
- ⑤ 応用的価値がたかい（応用しやすい、新たな研究をうみだす）

からは、比較的高い評価を与えることが出来よう。

次に良き理論の役割である 3 つの基準,

- ① 知識、知見を組織的に整理し、法則性を説明する
- ② 新たな法則性を予測する
- ③ 新たな研究を導くこと

をどの程度満たすと評価できるだろうか。知見の組織的整理、新たな研究を導く役割は十分に持つと評価できる。しかし、法則性を説明する際には、現在のパーソナリティ心理学や社会心理学においては、メタ理論による説明にとどまらざるをえない（山岸, 2001, P. 6～11）。いまのところ、生物学的、生理学的な自然科学的説明が期待できないから、5 因子理論だけを科学的理論としての説明力が弱いと責めるわけにはいかない。将来、自然科学的な説明力を持ったにしろ、パーソナリティの十全な理解を達成しているかどうかは、パーソナリティに関する認識論の議論が必要である。特に特性論をめぐる議論には、パーソナリティを如何に認識すべきかという認識論が横たわっており、科学理論として 5 因子理論が有効かどうか、これらの議論を抜きにすることはできない¹⁷⁾。

むすびにかえて

本稿を終えるにあたり、5 因子理論の今後の進展に関して 3 つの課題を指摘しておきたい。

- ① 認知—情動系およびモチベーションの位置づけを明確にすべきである。
- ② 力学過程（パーソナリティシステムの構造化機能）についてさらに詳細な考察がなされるべきである。
- ③ 5 因子理論の自己概念に関する領域とそれに関わる力学過程に関しては、過去から現在にいたるまで、多数の概念、視点や議論が百出している。今後、これらを整理したうえで定

式化されるべきである。自己（概念）要素を中心とする主体的なパーソナリティ過程への関わりの視点がさらに盛り込まれると予想する。

5因子理論は、person-situation debateで明らかにされた旧来の素朴特性論の限界（散弾銃を撃つがごとくパーソナリティに関係しそうな諸変数を理論的省察もなしに並べたアプローチのこと。実質的な理論的發展にはつながらなかった）を越えようとする新たな特性論のメタ理論である。いわゆるパーソナリティの表出因を基本的傾向性と特有的適応に区別することの重要性を強調したことが功を奏している¹⁸⁾。

5因子理論は、社会的認知理論の接近にみられる、主体論的視点（認知—情動系、自己概念、自己効力、自己制御）、相互作用論的視点（自己、環境、行動との往還的相互作用）、多少ではあるがヒューマニスティック心理学の新展開の動向（McAdamsなど）を取り込もうとする意欲的な試みでもある。5因子理論がカバーする領域は広いがゆえに、人間の本質を理解する構図として力を発揮するであろう。ことに要素間の力学過程（パーソナリティ過程）については豊かな内容を秘めていると直感される。研究者自身やクライアントのパーソナリティ理解にパーソナリティシステムや定式化を当てはめて考えてみることで、その威力が実感されるはずである。特性論は元来、量的志向であるが、5因子理論は、事例理解の構図としても強力な分析力を発揮するだろう。

最後に、本研究の今後の展開について述べておきたい。5因子理論はパーソナリティのシステムの理論の一種である。今後は5因子理論以外の個人差変数を扱うパーソナリティ関連のシステムの諸理論を紹介し、その科学理論としての性能および実証的有効性について、検討をくわえていきたい。また、中範囲（middle range）以下のパーソナリティ過程のモデル化に際して、社会・認知論的接近のほうが有用であると考えており、今後の検討を予定している。さらに今日の個人差変数を用いた数量的な研究では、理論と実証手段の論理との乖離があると思われるので、心理測定法の観点からみた実証方法論の考察も今後必要であると考えている。

注

- 1) ただし、このような現状は何も心理学者の怠慢や学力不足によるものでは決してない。ひとえに心理学が扱う対象の性質のゆえでもある。つまり、数量化しにくく直接観察できない構成概念を間接測定せざるをえないことが多いこと、測定およびモデル化における誤差分散が物理学、化学などの自然科学にくらべてはるかに大きくならざるをえないこと、本来、行動（唯一直接観測できる変数）などの研究対象は多重決定系（複雑系で混沌系）であること、などである。
- 2) 筆者の理論不足による最近の失敗例をしめそう。かつて筆者は、大学生の政治的無関心を規定する心理的要因を特定化しようとして、構造方程式モデリングの利用を試みた。政治学、社会学、社会心理学らの関連研究をみたが、態度—行動関係理論の諸変数、self-esteem、Locus of control 関係（anomia、political alienation）以外には、政治的無関心の個人差に関与する変数が見当たらない。そこで、とりあえず関連のありそうな変数群を探索的因子分析（斜交因子）や変数間クラスター分析で整理をおこなった。そして、因子間相関や因子パターンなどを参考にして、モデル構築をしようとしたが、有意

味な構造が浮かび上がらず、その後の分析がストップしている。このような探索的研究が失敗する原因を考えてみると、同義反復的な変数ばかりが多い、モデルをカバーする重要な変数（特に原因、結果変数、媒介変数）が、分析変数群から欠落していることなどがあげられる。

注）近年は、一時点で測定された多変量データ（相関的多変量データ）に因果モデルを当てはめた構造方程式モデリング（共分散構造分析、LISREL、確認的因子分析など）も普及してきた。しかし、理論的検討を十分に経ないで、とりあえず測定変数を設定して探索的因子分析をおこない、当てはまりのよい因果モデルを探索するという接近法は、よっぽどの僥倖に巡り合わない限り、有意な結果を得ることは困難である（豊田・豊田研究室、1997）。これらの手法が普及するにつれ、実証は理論と関わりを持ってこそ、単なる記述にとどまることなく、科学たりうることが認識されつつあるように思う。一つの打開策として、豊田・豊田研究室（1997）は、構造方程式モデリングを用いた「モデル優先型調査研究」という方法を提唱している。ステップ①では、KJ法、ブレインストーミングを用いて、明示的な構成概念の定義を言明する。

- ① 構成概念を定義し、分析対象を明確化する。
- ② 構成概念間の関係を記述し、構造方程式を特定する。
- ③ 構成概念を測定するための項目をつくり、測定方程式を特定する。
- ④ モデルに合わせてデータを収集する。
- ⑤ 当初のパス図どおりに計算して適合度を確認する。
- ⑥ モデル探索は極力しないで、モデル解釈を進める。

- 3) 特性論も、人は状況下に生きていることを無視してまで、パーソナリティ特性に全ての原因を帰するような行き過ぎがあったことは反省すべきである。例えば、昔、全くの新製品であったパンティストッキングの新規採用者のセグメンテーションに性格検査を用いたり、J.B. RotterらのIE尺度で、種々の社会的行動を理論的背景もなく予測したりすることがよく見られた（同尺度は不思議といろんな変数と相関するのであった）。要するに種々の行動に関する理論的考察もなく、ただパーソナリティ変数だというだけで測定用具に入れてしまう。結果は、なんとなく分かった気になるが、単に思考停止に陥ってしまうくらいがあった。
- 4) 本研究では、個人差変数に関する理論として、5因子理論に並んで、social-cognitive approachesに関しても興味を寄せており、今後の検討対象となる。なお、5因子理論はsocial-cognitive approachesの主張を理論の中に明らかに取り込もうとしている。それは、ふたたび疑似科学的な単一要因（すなわち特性）優越仮説の轍をふまない試みである。
- 5) ここで、social-cognitive approachesについて簡単に説明しておく。特性論は、記述的タクソミーにとどまりがちで、パーソナリティや人間行動の一般的傾向（ただし、共通のものさし上での個人差の法則性）を要約しようとする。特性論者は特性が文脈的に定義されているわけでないのに、特定場面、文脈と関連するであろうとする。これに対してsocial-cognitive approachesつまり社会・認知論では人格機能の因果的、動機論的な因果的説明をめざす。社会・認知論は、状況や文脈の中の人間を対象とした認知—情動過程を対象とする。ゆえにこの立場は近視眼的とまでいわずとも、射程が狭くなりやすい。認知—情動過程とは、認知的過程（符号化：encoding）、特に自己とかわる認知過程（例：自己概念、基準、目標）を通じて出来事を意味付け、行為の進行を計画し、動機づけ、感情、対人行動を統御する過程である。これらは本質的に文脈的で、環境（特に他者）との相互作用を通じて、対人関係、自己に関する知識は発達するとした。また、分析の対象として、人、環境、行動をすべて射程にいれるという特徴がある。
- 6) メタ理論ということだが、比較的射程の広いground theoryでもある。McCrae & Costa (1996, p. 65) は、5因子モデルは、パーソナリティの完全なモデルを提供するものでもないし、できないというコメンテーターの意見（McAdams, 1992; Pervin, 1994）に同意している。また、5因子モデル自体では、「社会的役割がどのようにして個人のアイデンティティを作り上げるのか?」、「どのように行

動のフロー（流れ）を組織化するのか？」、「態度（attitude）はどのように形成され、変化するか？」などの疑問を説明し得ないし、上記問題やその他の多くの重要な現象を完全に説明するには、特性心理学以上の多くの領域からの説明が必要であるとしている。5因子理論に関しては、次のように述べている。種々の理論家たちが特定化してきた人間性の諸側面の大半、および関心を寄せてきた変数の大半を包含するメタ理論的フレームワーク（枠組み）をスケッチしていくが、ただか数頁の紙幅で、包括的なパーソナリティ理論を供しうるなどとうそぶくつもりもないということである。しかし、この接近を例示することが、21世紀における新しい、そしてみのある人格理論へと導くことを希望すると述べている。

- 7) McCraeとCostaの理論的立場をよく理解するために、彼ら自身による紹介があるので、抄訳にて紹介しておく（Pervin, 1996）。「パーソナリティのFFM」と題した寄稿文である。

1970年代半ばの頃、パーソナリティ特性は人の認知に現れた虚構であり、50年の年月をかけて苦心して作り上げた質問紙性格検査への反応はステレオタイプ、反応スタイル、印象管理にすぎないと、大半のパーソナリティ心理学者と社会心理学者は真剣に信じていた。

2人は1975年に共同研究をはじめた。このような時代に、他の心理学者にはない直感を、すなわち「特性は実在する」という強い直感を持って、ボストンにおける縦断研究に従事した。データはすくなくともN, E, Oの3つの広範なパーソナリティ次元で有意な形で定義できる。これらの次元における個人の得点は、顕著に長期間に渡って安定的であった。これらの尺度は、医学的な病気、生活満足度のような重要な結果を予測した。これらの初期の知見の結合により、1980年代の特性理論の再興の告知へとわれわれを導くこととなった。つづく研究での多くの同僚からは、先の3因子をN, E, O, A, Cの5因子へ拡張する必要性、更に、これらの特性因子が遺伝的であること、非常に類似した因子が多くの異なる言語圏と文化で見出していることを学んだ。NEO personality inventoryは広範囲の心理学的現象、精神医学、職業興味、業務達成度に至るまで、使用することができる。

特性理論は人間の本質理解の最も古いパラダイムの一つであるが、今やその名声を取り戻している。5つの生得的で普遍的な因子によって個人差を理解可能であり、この5因子は通時的安定性も高く、人生を通して重要な結果に関わる。

詳細において成されるべき事が残っている。どの具体的特性がGlobal Factorを定義するために最適であるか？ 2者のパーソナリティ評定の不一致はどのように認識すればよいのか？ または解消すべきか？ 文化的多様性が特性の表出をどのように形作るか？ 特性と欲求、動機間の概念的接合はなにか？ 5因子以外の追加因子が人格障害を説明するために必要か？ 同じ個人内の異なる特性の表出を調和させる心理過程とはなにか？

この特性論の再興と5因子をめぐる研究の増加と対立的モデルやパラダイムの挑戦、パーソナリティ心理学におけるエキサイティングな時代であるといえる。

- 8) Dan P. McAdamsは、パーソナリティを全体として（as a whole）理解するための大きなシステムにアイデンティティのライフストーリーモデルを統合化しようとした。彼によれば、パーソナリティ心理学の目的が人間の個性の説明を提供することにあるならば、そのような説明は、3つの異なった水準（levels）から可能という。そして、5因子理論における基本的傾向性と特有的適応は、それぞれ順にLevel 1, Level 2に該当する。筆者は、二重の同心円を描き、Level 1を核にして、Level 2を外円として説明することが多い。われわれは、この二重円全体をパーソナリティとしてみる人が多い。

Level 1は、Big 5因子の枠組みのごとく傾性、特性を通じて表現されるものであり、個性の傾性的現われである。Level 2はlevel 1よりも特定の文脈のもとでの見方のなかに表現されたもので、時間と場所と役割のなかで個人の生活を文脈に対応させるところの、個人的な関心・価値・企図・目標・段階・課題・戦略、そして動機的、発達の、戦略的関心といった特有的適応である。Level 1は、個性の初期的概略を示すものでLevel 2は、諸条件下の詳細を与えるものである。これらだけでは、

東：パーソナリティ心理学と社会心理学における個人差変数の理論的構図（I）

個々人の生の全般的な意味と目的を供するものではない。そこで、Level 3 であるところの、統合的な life story はアイデンティティと生きる目的に関する人間の個別性の諸側面を捉えている。life story は、ことに近代社会における個人のあり方 (individuality) の重要な側面をなすとした。

- 9) 近年の発達心理学、比較心理学、進化心理学の研究によれば、自分の心（自己意識、感情、意図などの認知過程）を認識するという人間の能力は、かなり高度な認識能力であることがわかっている。さらにこの能力をもとに他者の「ところ」を推測しうる自我理解の能力（心の理論）は進化的に適応価を持ってきたと考える立場もでてきた。また、自己をめぐる社会心理学の研究も目覚ましい進展をとげている。これらのことから、自己（概念）をパーソナリティ過程、認知過程における機能的単位として扱うべきであるということになる。
- 10) カテゴリーと要素は同義に使われている。成分 (Component) はシステム内の部分的なまとまりのことである。カテゴリーという場合、当該カテゴリーに種々のパーソナリティ変数が含まれていることを示す。その例は Table 2 を参照のこと。
- 11) 外生変数とは、システム内で他の変数から説明（影響）されることはなく、他の変数へ影響を及ぼす変数のこと。内生変数とは、システム内の他の変数や外生変数から説明（影響）される変数のことである。パスダイアグラムに表せば、外生変数は、誤差変数を含め、他のどの変数からも矢印はささらない。その代わり、何かの他の変数に影響を与える。すなわち矢印が刺さる。内生変数は、誤差変数を含め、他の変数の矢印が刺さる変数である。外生変数、内生変数とも元来、計量経済学の構造方程式体系の用語である。図にあるとおり、基本的傾向性も生物学的基礎から影響をうけているため、厳密には外生変数といえない。しかし、パーソナリティシステム内では、生得的要素のつよい基本的傾向性に影響を与える変数は生物学的基礎以外にはないことから、外生変数と見なしても大差がないといえる。細かい部分を手直しするよりも、1996年の定式化を基盤にしたとの意図から、さらには特性論者としてパーソナリティ特性がパーソナリティシステムの外生変数（独立変数）という主張から、基本的傾向性を外生変数と大まかにみなしているようである。
- 12) 共有環境とは、家族の成員を類似させる働きを持った非遺伝的要因の効果の総体である。非共有環境とは、共有環境とは違い、同居していたとしても互いに共有されず、家族一人一人の個性、個人差の増大にかかわってくる非遺伝的要因の総体である（安藤、2000, p. 163～165）。
- 13) 横断的 (cross sectional) な研究によれば、成人期において、ゆっくりと N, E, O は減少し、A, C は増加していく。しかし、パーソナリティ特性のレベル内での本質的で内生的な成熟過程であると考えられている。縦断的には、その変化パターンと特异的適応の関係が興味ぶかい。
- 14) しかし、環境の支配下におかれており、自分の力ではどうにもならないと考え、行動を起こして環境に働きかけない人もいる。これは自己意識系（自己概念）の影響を受けて、その人の行動が規制されたままになっている状態を意味する。それゆえ、その人のおかれた状況がいつまでも変わらない。その結果、その人を不遇に処するところの環境は変わらないだけでなく、本人のスキルや認知様式、対人関係など特异的適応もかわらないからますます環境は改善されない。そして自分は無力だとする自己概念はそのまま維持される。または、積極的に行動しない理由を変わらない状況に帰属し、自分は状況の犠牲者であると自己認識するなど、何らかの防衛のメカニズムを働かせることになるという悪循環過程も考えられる。このように自己意識系（5因子理論では、自己概念）と特异的適応、客観的成育史、外的要因の力学過程は豊かなインプリケーションを持っている。自己 (self) に関する社会心理学の成果（自己評価維持、自己確証過程、セルフハンディキャッピング、自己挫折化過程など）が接続可能ではないだろうか。また、社会・認知アプローチも接続可能ではないだろうか。
- 15) 専門外にも関わらず、筆者は人々にヒューマニスティック心理学の諸論を講ずることがある。筆者のつたない説明のせいなのか、つぎのような質問がよくある。自己実現した一部の偉人の分析でなく、一般人の中で、その人なりの自己実現へ向かう条件とは何か、肯定的な意味でその人らしく生きることができるとそうはならない人の違いはなぜ生じるのかという質問が寄せられる。言い換えれば基

本の傾向性、特有的適応、外的影響因、客観的成育史、その影響をうけて形成された自己（概念）などの力学過程などにおいて、自己実現へ向かう（自己実現から遠ざかる）諸条件を特定化してほしいというのである。かかる疑問に答えるべく事例研究を試みるならば、筆者は5因子理論の枠組みを利用するだろう。

- 16) 筆者は、5因子を上位因子として、下位の変数、facetsがどのように位置づけられるかの検証が有効であると考えている。つまり、facetsの尺度から一次因子、2次因子…とつづく階層因子分析的接近が有効であると思われる。特にfacets（習慣的反応水準、具体性が高い水準）は分析結果から帰納的に（後づけ的に）定義されるのではなく、これまでの研究蓄積から設定されることが望ましい。なお、因子分析的接近は必然的に階層構造を設定せざるをえなくなるが、理論的裏付けがあれば階層性を仮設する必要はなく、より自在な変数構造の解析は構造方程式モデリングで幅ひろく対応できる。生物学的、大脳生理学的基礎にもとづくパーソナリティ特性に関する理論の実証において役立つのではないか。
- 17) 科学理論には公理（前提となる仮定）がある。5因子理論は次のような人間の本質に関する仮定をおいている。それを、抄訳にて紹介しておく（McCrae & Costa, 1999, p. 140-141）。

特性論のバースペクティブは、全ての心理学理論と同様、次のような仮定群を基礎においている。それらは、人々は何の特徴があるか、パーソナリティ理論はなにをすべきかについての仮定である。多くの仮定は、明示的でない。例えば、行動の説明はその生活体の環境に求められるべきである。以前の環境で染み付いたカルマではないというように。FFTは明示的に人間の本質に対して4つの仮定——knowability, rationality, variability, そしてproactivity——を認めている。それらすべては特性論的研究の標準的企てにおいて暗黙的に見受けられるものである。

Knowability（可知の対象であること）、とはパーソナリティは科学的研究の適切な対象であるという仮定である。ヒューマニスティック心理学と実存的理論のいくつか——人間の自由と単純化できない個人の固有性をほめたたえる——とは対照的に、FFTは個人レベルと集団レベルのパーソナリティの科学的研究から収穫すべき知見が存在すると仮定している。（中略）

Rationality（理解能力）は、誤差とバイアスにもかかわらず、人々は自分自身や他者を理解する能力があるという仮定である。この点に関して、心理学は通常科学ではない。医師は患者に患者自身の白血球量の推定をたずねたりしないだろう。なぜなら、患者はそのような情報を持っていると期待できないからであろう。しかし、特性心理学者は決まりきって——そして当然だが——人々にどのように社会的か競争的かいらいらしているかをたずね、彼らが理解したものをすべてを意味あるものとして回答反応（適切に集計され、基準化されたもの）を解釈する。心理学者がそのようなことができるのは、パーソナリティ特性に関して、市井の人が、重大な対人判断を表現する世紀をこえて進化した特性表現のための言語を使用する非常に洗練された判定者であるからなのだ。

Rationality（理解能力）の仮定は、FFTは単なる民間心理学であるということの意味しない。民間的理解は、ほとんど、表現型的水準（phenotypic level）に限られている。それに対し、FFTは遺伝子型水準（個人内の潜在的恒常的にある原因）とその作動を説明することを試みるのだ。人々は他者が尊大な人か謙虚な人かを理解する。しかし、人々は謙遜の遺伝性を直感的に知ることはしないし、あるいはライフスパンの発達の経路、あるいは進化的重要性を知ることはない。かくて、特性論の心理学は具象派芸術である：見る人は透視画法の法則あるいはオーバーペインティングの技法について全く知らなかつとも、顔か花を認識する。

Variability（多様性）の仮定は、心理学的に有意義な面で——明らかに差異心理学にとって明白な前提である——、人々は互いに違ふと主張しているものだ。しかしながら、明記すべきは、この立場こそが、特性理論を他の人間の本質に関する、その他全ての見地、つまり、人間の本質とは本当にどのようなものなのかに関して単一の回答を求める哲学的、心理学的な見地とことなるところなのである。人々は基本的に利己的か愛他的か？ 創造的か因習的なのか？ 決断力があるのか怠惰か？

FFT 内では、これらはすべて無意味な問いであって、「創造的」と「因習的」は人々をさまざまに位置づけるところの次元（ものさし）の両極であると定義する。

Proactivity（主導的内因性）という仮定は、人間の行為の原因が位置する場所はその人の中に求めるべきであるという仮定である。いうまでもなく、人々は自分の運命の絶対的な支配者でない。そして、多様性の前提と一貫するように、人々は自身の生活を統制する程度においても異なっているのは言うまでもない。しかし、特性論は行動の源泉をその人の性格の中に行動の原因を求めることは価値があると考え。人々は生活の境遇の受け身な犠牲者でも強化履歴によってプログラムされた空っぽの有機体でもない。パーソナリティは自身の生活を形作る中に積極的に関わっているのだ。

パーソナリティの Proactivity はその人の Proactivity（能動性）と等価でないことを認識しておくことは重要である。人のパーソナリティの Proactivity はその人の意志的な目標と同じではない。ダイエットの持続に失敗することは、ダイエットの成功と同じく、大半がその人のパーソナリティの表出である；不安と抑うつはその人自身の生活における自然状態である（たとえ有害であろうとも）。

- 18) なお、実証においては、パーソナリティの質問紙尺度には、しばしば、特徴的適応に関する質問が使われるように、基本的傾向性と特有的適応を分離することは困難である。性格検査のなかには習慣、態度、対人関係の傾向、選好傾向、社会的スキル、行動傾向が含まれ、それらはパーソナリティ特性を評価するためにしばしば用いられる。しかし、このように具体的な行動傾向をきくことは適切なことであろう。これらは背後にある特性の徴候であるからである。この場合、心理測定的には潜在変数として、基本的傾向性を測定していると考えている。しかし基本的傾向性とその表現型である特有的適応は、概念的には違う水準にあることを認識しておくべきである。実証研究（量的、質的研究）における調査研究の図式としては、5つの要素の分離明確化が測定変数のカテゴリーを混同しないために有効である。

文 献

- Ahadi, S., & Diener, E. 1989 Multiple determinants and and effect size. *Journal of Personality and Social psychology*, 56, 398 – 406.
- Allport, G. W. 1931 What is a trait of Personality? *Journal of abnormal and social psychology*, 25, 368 – 372.
- Allport, G. W. 1935 attitudes. In C. Murchison (Ed.), *A handbook of social psychology*. Worcester, MA: Clark University Press.
- Allport, G. W. 1961 *Pattern and Growth in Personality*. New York: Holt, Reinhart and Winston.
- 安藤寿康 2000 心はどのように遺伝するか 講談社ブルーバックス
- Bandura, A. 1986 *Social foundations of thought and action: A social cognitive theory*, Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Bandura, A. 1999 Social cognitive theory of personality. In L. A. Pervin, and O. P. John (Eds.), *Handbook of personality: Theory and research* (2nd ed). New York, NY, US: The Guilford Press.
- Bandura, A. 1989 Human Agency in social cognitive theory. *American Psychologist*, 44, 1175 – 1184.
- Buss, D. M. 1987 Selection, Evocation, and Manipulation. *Journal of Personality and Social psychology*, 53, 1214 – 1221.
- Buss, D. M. 1991 Evolutionary personality psychology. *Annual Review of psychology*, 42, 459 – 491.
- Cattell, R. B. 1957 *Personality and Motivation: Structure and measurement*. Yonker-on-Hudson, NY: World Book Co.
- Cattell, R. B. 1996 Advances in Cattellian personality theory. In L. A. Pervin (ed.) *Handbook of personality: Theory and Research* (pp. 101 – 110). New York: Guilford.

- Cervone, D. 1991 The two disciplines of personality psychology. *Psychological Science*, 2, 371 – 377.
- Costa, P. T., Jr. & McCrae, R. R. 1993 Ego development and trait models of personality. *Psychological Inquiry*, 4, 20 – 23.
- Costa, P. T., Jr. & McCrae, R. R. 1994a Domains and facets: hierarchical personality assessment using the Revised NEO Personality Inventory. *Journal of personality assessment*, 64, 21 – 50.
- Costa, P. T., Jr. & McCrae, R. R. 1994b “Set like plaster”? Evidence for the stability of adult personality. In T. Heatherton & J. Weinberger (Eds.) *Can personality change?* (pp. 21 – 41). Washington, DC: American Psychological Association.
- Eagly, A. H. & Chaiken, S. 1993 *The psychology of attitudes*. Fort Worth, TX: Harcourt Brace Jovanovich.
- Eysenck, H. J. 1957 *The Structure of Human Personality*. New York: John Wiley.
- Epstein, S. 1979 The stability of behavior: I. On prediction most of the people much of the time. *Journal of Personality and Social psychology*, 37, 1097 – 1126.
- Freud, S. 1933 *New introductory Lectures in Psychoanalysis*. (W. J. H. Sprott, Trans.). New York: Norton.
- Gulford, J. P. 1959 *Personality*. New York: McGraw-Hill.
- Jung, C. G. 1933 *Modern Man in Search of a soul*. (W. S. Dell & C. F. Baynes, Trans.). New York: Praeger. Harcourt Brace Jovanovich.
- McCrae, R. R. 1996 Social consequences of experiential openness. *Psychological Bulletin*, 120, 323 – 337.
- McCrae, R. R. & Costa, P. T. Jr., 1996 Toward a new generation of personality theories: Theoretical contexts for the five-factor model. In J. S. Wiggins (Ed.), *The five-factor models of Personality: Theoretical Perspectives* (pp. 269 – 290). Orlando, FL: Academic Press.
- McCrae & Costa 1999 A five-factor theory of personality. In L. A. Pervin, and O. P. John (Eds.), *Handbook of personality: Theory and research* (2nd ed). New York, NY, US: The Guilford Press.
- Murray, H. A. & Kluckhohn, C. 1953 outline of a conception of personality. In C. Kluckhohn & H. A. Murray (Eds.), *Personality in nature, society, and culture*. (2nd Ed., pp. 3 – 52). New York: Knopf.
- Klinger, E. 1977 *Meaning and void: Inner Experience and the incentives in people's lives Minneapolis*: University of Minnesota Press.
- 岡本浩一 1999 性格 (梅本堯夫・大山 正・岡本浩一「心理学」) サイエンス社 130 – 131.
- McAdams, D. P. 1992 The five-factor model in personality: A critical appraisal. *Journal of Personality*, 60, 329 – 361.
- McAdams, D. P. 1992 Unity and purpose in human lives: The emergence of identity as a life story. In A. I. Rabin, R. A. Zucker, R. A. Emmons, & S. Frank (Eds.), *Studying persons and lives* (pp. 148 – 200). New York: Springer.
- McAdams, D. P. 1993 Personality, Modernity, and the storied self: A contemporary framework for Studying persons. *Psychological Inquiry*, 7, 295 – 321.
- McAdams, D. P. 1993 *The stories we live by: Personal myths and the making of the self*. New York: William Morrow.
- McCrae, R. R. 1993 Moderated Analyses of longitudinal personality stability. *Journal of Personality and Social psychology*, 65, 577 – 585.
- McCrae, R. R. & Costa, P. T., Jr. 1988 Age, personality, and the spontaneous self-concept. *Journal of Gerontology: Social Sciences*, 43, S177 – S185.

東：パーソナリティ心理学と社会心理学における個人差変数の理論的構図（I）

- McCrae, R. R. & Costa, P. T., Jr. 1990 Personality in Adulthood. *New York: Guilford Press.*
- Mischel, W. 1968 Personality and Assessment. *New York: John Wiley.*
- West, S. G. 1983 Personality and prediction: An introduction. *Journal of personality*, 51, 275 - 285.
- Mischel, W. & Shoda Y. 1999 Integrating dispositions and processing Dynamics within a Unified theory of personality: The cognitive-affective personality System. In L. A. Pervin, and O. P. John (Eds.), *Handbook of personality: Theory and research* (2nd ed). New York, NY, US: The Guilford Press.
- McBurney, D. H. 2001 *Research Methods*. Wadsworth, USA.
- Monte, C. F. 1977 *Beneath the mask: An Introduction to theories of personality*. New York: Praeger.
- Petty, R. E. & Cacioppo, J. T. 1981 *Attitudes and persuasion: Classic and contemporary approaches*. Dubuque, Ia.: Wm. C. Brown.
- Pervin, L. A. 1994 A critical analysis of current trait theory. *Psychological Inquiry*, 5, 103 - 113.
- Pervin, L. 1996 *The science of personality*. John Wiley & ons, Inc
- Plomin, R., & Daniels, D. 1987 Why are children in same family so different from one another? *Behavioral and Brain Sciences*, 10, 1 - 16.
- Rogers, C. 1961 *On Becoming a person: A therapist's view of psychotherapy*. Boston: Houghton: Mufflin.
- 鈴木乙史 1998 性格形成と変化の心理学 ブレーン出版
- Snyder, M. 1983 The influence of individuals on situations: Implication for understandings the links between personality and social behavior. *Journal of Personality*, 51, 497 - 516.
- Tellegen, A., Lykken, D. T., Bouchard, T. J., Jr., Wilcox, K. J., Segal, N. L., & Rich, S. 1988 Personality similarity in twins reared apart and together. *Journal of Personality and Social psychology*, 54, 1031 - 1039.
- Thorne, A 1989 Conditional patterns, transference, and coherence of personality across time. In D. M. Buss & N. Canter (Eds.) *Personality psychology: recent trends and Emerging directions* (pp. 149 - 159). New York: Springer-verlag.
- 豊田秀樹・豊田研究室 1997 大学生気質理解のための因果モデル構成の試み —— 大学生の自立, 物を大切にする心, 孤独感 —— 応用社会学研究, 39, 37 - 59.
- 辻平治郎 (編) 1998 5因子性格検査の理論と実際 北大路書房
- Wiggins, J. S. 1997 In defense of traits. In Hogan, J. A. Johnson, & S. R. Briggs (Eds), *Handbook of personality psychology* (pp. 97 - 115). San Diego: Academic Press. (Original work presented 1973)
- 山岸俊男 2001 社会心理学の目的と方法 (山岸俊男編「社会心理学キーワード」有斐閣, pp. 2 ~ 16)

2002年6月8日 受理